



龍澤山善宝寺における現世利益信仰 -- 信者の祈願 と寺院の生存戦略--

著者	阿部 友紀
号	24
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博 第414 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59331

あべとものり 阿部友紀

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 414 号
学位授与年月日	平成24年 7 月12日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
最終学歴	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 人間科学専攻
学位論文題目	龍澤山善宝寺における現世利益信仰 ——信者の祈願と寺院の生存戦略——
論文審査委員	(主査) 教授 鈴木 岩 弓 教授 桜井 宗 信 准教授 木 村 敏 明 准教授 山 田 仁 史

論文内容の要旨

本研究は、民衆がどのような宗教的要求を持ち、仏教寺院はその要求に対していかに応答してきたか、民衆と寺院の二者関係の中において構築されてきた相互作用としての信仰を、ある特定の寺院すなわち、曹洞宗総持寺直末の祈祷寺院である山形県鶴岡市の龍澤山善宝寺とその信者から考察するのを目的としている。

第一章の「龍澤山善宝寺」では善宝寺の先行研究と沿革についてまとめた。善宝寺の先行研究数は少ないが、傾向としては寺院史の見地から善宝寺初期段階へと向かう研究と、龍神信仰の伝播に関する研究、善宝寺にゆかりがある祈祷師に関する研究に分類し、それぞれの研究の意義について論じた。沿革史において特に重視したのは、一つには「善宝寺縁起」であり、もう一つは境内拡張のトピックについてである。この二つについては、現在の善宝寺における民衆と寺院の関係に直接的に関係するからである。「善宝寺縁起」においては、善宝寺の守護神である龍神が善宝寺の高僧たちどのような関係を築いていったのかに留意した。龍神は計三回姿を現しており、最初は法華經の功德を説くものであり、二度目・三度目は龍神が仏門に入り寺院を守護する、いわゆる「神人化度」の寺社縁起であり、この伝承が龍神信仰の基礎である。一度目の場合、二度目の龍神が法華經の功德を受ける、受戒するということによって受動的な位置にあった。しかし三度目の場合、戒を受けることを条件に利益を受ける側への転換がなされている。この三度目の戒脈伝授こそ、龍神が信者に現世利益をもたらす直接の由来であったと考えている。つまり「開山縁起」が、単に説話の「伝承世界」の中の物語でなく、現在においても息づいているのである。江戸期の善宝寺の様子は不明点多かった。しかしながら天明六年(一七八六)には、

大阪堺で土砂退散加持を修したという事実があり、同年に有栖川宮家祈願所に定められたところから、近畿にても知られていたとみることができる。境内拡張は江戸期から続いていたが、明治期の住職であった水野禅山は五重塔（魚類一切之供養塔）建設の大事業に着工し、その資金を勧募で集めていた。そのため水野は布教・勧募に熱心に携わった。その結果禅宝寺と信者の関係ができあがった。その信者らを善宝寺龍王講社として組織化していったのが当時の住職吉泉禅教であった。

次に戦後の境内拡張についてだが、戦後の境内整備には昭和二二年から昭和五三年まで住職にあった五十嵐顕道の影響が大きい。五十嵐は大本堂の建立、信徒会館の建設、龍神が潜むとされる貝喰池などの整備を推進していった。この五十嵐による境内整備と平行して、信者を講員に位置付けようとする「善宝寺龍王講」が発足した。これは境内整備による龍神信仰の盛り上がりを経営という形式で持続していこうということである。戦後復興期における五十嵐顕道の活動は現世利益と結びついた龍神信仰の喧伝によって多くの信者を集め、その信者を龍王講に吸収し、信者と善宝寺の関係を持続的に強化したといえる。

第二章は「善宝寺の信者獲得と生存戦略」として寺院が持続していくための工夫や営為を生存戦略と位置づけて、善宝寺がどのように行っているかを論じた。

第一節において善宝寺の寺域を「聖地空間」とし、その空間の構成と信者を信者によって提示された改編を善宝寺が受容していくプロセスについて考察した。善宝寺の聖地空間はその意味づけの違いから四区域に分割できる。まず大本堂や専門宗、堂龍神を祀った龍王殿がある境内中央区域だが、こちらは僧侶が中心となって整備され、維持されている空間である。この空間は祈祷寺院としての要素、回向寺としての要素、修行寺がこの区域に集中しており、民衆が寺院に期待している機能の全てをこの区域に集約している。次に龍神が潜む貝喰池周辺は「奥の院」とされ、この空間は小杉講という講中によって整備されてきたのだが、その点は第四章第四節に詳しい。この空間では二月に立春お水取りの行事が行われるが、この行事は昭和四〇年に開始された行事であり、僧侶の関与よりも小杉講が龍神の託宣により導入し、善宝寺は行事を受け入れ定着するに至った行事である。この空間は境内中央区域と違い、信者のほうに主導権があったことを確認した。龍澤不動尊の空間も貝喰池と同様に信者によって整備されていった空間である。こちらは一度衰退してしまった霊場を北海道在住の霊能者が霊夢にみて、「放任すれば善宝寺の威神力が低下する」ということから整備を行ったのである。最後に善宝寺後方の日本海上の持国岩についてだが、こちらの空間は現在のところ聖地として機能していない。これらの境内中央区域と、貝喰池・龍澤不動尊を比較すると貝喰池・龍澤不動尊は信者が整備していった点に特徴がある。つまり信者が貝喰池・龍澤不動尊という空間に積極的に聖地としての意味を見出していき、自らの力で整備していったのである。

第二節では、善宝寺で修されている年中行事の一つである春期大祭に参与観察し、祈祷会の状況と現世利益信仰に関与している要素について考察した。その結果大般若会による祈祷は曹洞宗の儀軌マニュアルである『行持規範』を踏襲して修されており、現世利益信仰が大きく表面化するのには、大般若会のあと龍王殿で行われる儀礼であった。春期大祭における祈祷儀礼は『行持規範』による大般若会のほか、多様な現世利益を取り入れた龍王殿における祈祷と、二つの祈祷儀礼により成立しているとした。第三節においては、近代における略縁起による布教と題し、善宝寺が配布している『善宝寺略縁起』が布教に果たした役割は何であったかについて考察した。筆者は善宝寺が配布した略縁起は単に縁起を流布するためのものでなく、信者を獲得するために龍神のご利益を説いたメディアとした。また略縁起の内容を考察し、『善宝寺略縁起』を仏教縁起の観点から考察し、開基妙達上人と龍神の関係は法華経の龍神説話が基礎になっており、善宝寺の龍神は法華経に登場する八大龍王であること、第二に禅僧の神人化

度説話の構造を『善宝寺略縁起』にも用い龍神に血脈を授与することで寺院の守護神になり同時に所願成就の神に変貌したこと、第三に龍神と現世利益の接点は、龍神が寺院守護の守護神、所願成就の機能神の双方の機能を龍神が担うことで善宝寺の龍神が誕生したとした。

第三章では山形県・新潟県の漁村における龍神信仰について考察している。この二県の漁村には複数の龍王講があり、善宝寺への参拝を行っている。まず第一節では、新潟県村上市岩船漁港を事例に漁業暦における龍神信仰を論じた。漁業暦とは、漁業や漁撈活動に関係する年間行事全体をいい、この漁業暦を検討すると漁業と習俗や慣習がどのように関連しているか理解できる。新潟県では昭和五三年から漁村の生活調査を実施し、昭和五九年にまとめた資料を元に『新潟県漁村生活誌』をまとめた。この資料によると、新潟県の場合漁協単位で代参講をおこなっているのが理解できる。また代参を大祭時に合わせて送っているので、漁期に対応した代参でなく参拝時期を固定した定期参拝の形態をとっている。この点でいえば龍神信仰が特定の魚種・漁法との関連は薄く、広く「海の神」「漁業の神」として祀られているといえる。新潟県村上市岩船地区の調査では、善宝寺に関連する漁業暦は立春お水取りの祈祷会、四月中旬の春大祭、十一月の秋大祭に参拝をしている。岩船地区の代参は二月の初漁前の代参、十一月は終漁期代参との漁期に合わせた代参を実施している。また漁村では善宝寺の祈祷札のうち紙製の祈祷札を海に流す慣習がある。この海に流す祈祷札について考察したのが、第二節の漁民と祈祷札である。この節では善宝寺が祈祷を受けた際、納札（または流し札）と呼ばれる祈祷札を配布する。流し札は複数枚授かり、船内に安置される。同時に配布される木製の祈祷札は自宅や船内に安置される。新潟県岩船郡山北町では善宝寺の祈祷札について、次のように報告されている。「サケ・マス・定置網に参与する漁民のうち数名が善宝寺に代参し祈祷札をいただいくるそして大漁祈願として定置網の魚道に、波の退散として、港の口にお札を沈める」とある。また新潟県新発田市藤塚浜の事例では、「地引網・定置網開始の際善宝寺のお札を海に沈める」とあり、初漁の時期、特に初網を降ろすとき流し札を海に流している。また流し札が使用されているのは初漁のみではなく、不漁儀礼として魚が獲れないときにも祈祷札が使われている。新潟県胎内市の事例では「不漁の際、船首につけたお札を海に流して祈願した」という。また悪天候の際にも使用され山形県鶴岡市由良の事例では、「荒天で波が高く港の入り口の見当のつかないときお札を流した。そうすると波が収まり港に入りやすくなる」とされている。網や碇が根がかりして上がらないときも祈祷札は沈められる。そうすると網や碇がはずれるそうである。このように善宝寺の祈祷札が「大漁満足」「海上安全」「海難救助」のために海に流すという習俗が各地で行われていることがわかった。

この祈祷札の由来を考察すると、善宝寺の開山縁起に関係があるという仮説を立てた。開山縁起に次のようにある。延慶二年（一三〇九）、総持寺二祖・善宝寺開祖峨山紹碩が妙達山に順錫し、妙達上人の座禅石に座禅していると龍神が現れた。禅師が「三帰戒」を授けると貝喰池に消えた。また、文安三年（一四四七）、善宝寺開山太年浄椿は龍華寺を復興して龍澤山と号し、善宝寺と改めた。その受戒式に再度龍神が現れ、戒脈伝授を願う。「我は八大龍王の一人なり。ともなえるは第三の龍女なり。さきに妙達上人の甘露の妙典の功德を受け、更に峨山禅師に参じて戒を受け、ここに太年禅師には受戒で血脈を授けられ、不退転の法樂を得たり、我眷属を率いて尽未来際、この御山を守護せらん。我に祈請するものあらば、必ず心願成就せしめん」（『善宝寺』しおりから抜粋）とあり、龍神が高僧から戒脈を受け取っており、その結果「我に祈請するものあらば、必ず心願成就せしめん」と龍神は誓願をしているのである。流し札には釈迦に始まり八大龍王に続く「血脈」が封入されている。したがって漁民が海上安全や大漁満足などの「ご利益」を龍神に求めるときは、「血脈」を龍神に授与することによって、「ご利益」を受け取るという論理が作用しているのではないかと論じた。

第三節において漁村における「祈願」に対して考察を深め、善宝寺への祈願を「公」の祈願と「私」の祈願の二つの相を論点として設定した。「公」の祈願とは、漁協での参拝や代参のように、集団でなされる団体参拝である。それに対して「私」の祈願とは、団体参拝の形式に飽き足らず個人でも参拝し祈願することをいう。「公」の祈願と「私」の祈願を比較すると、「公」の祈願は祈祷料など一律的に設定されている。しかしこの「公」の参拝はご利益が無く「効かない」と言われている。祈祷料などの金額が安く「効かない」とされている。したがって「効かない」祈願では生活が成り立たなくなる漁師は「公」の祈願とは別に、「効く」祈願として「私」の祈願を行っている。また祈願の違いは、漁業という生業の特質性とも関連があり、共同作業で港の機能が成り立っているが、家計は個々の船の水揚げと関連がある。したがって共に作業をする仲間でもあるが、水揚げを競うライバルでもある。そのような漁村の人間観の関与も指摘した。

第四章では善宝寺の信者団体である、「善宝寺龍王講」の活動と講員について述べた。龍王講とは、善宝寺の龍神に団体で参拝し祈祷を受け、参拝しない場合は祈祷札の配布を受け取ることで龍神の「ご利益」を目的とした信仰の集団である。第一節において明治四四年に設立された龍王講の前身である善宝寺龍王講社の講社設立の趣旨書を引用し、設立目的・講社拡張をみることで、講社設立の由縁が善宝寺の堂社造営とも密接な関係があり、規約書においても講金が堂舎の修造できるとされていることで、龍王講社の設立が単純に龍神の功德を広めるためでなく、伽藍整備の意図があったと指摘した。現在の龍王講に関しては、講員数などの計量データを集計し、龍王講設立以降の変化について指摘した。その結果、一九八〇年代後半を境に大幅な講の縮小が起きており、二〇一〇年次でピーク時の54%にまで縮小している。そして龍王講を講員の出自から①漁業・海運関係者による団体参拝講・代参講、②多様な職業者による地域・地縁的団体参拝講、③祈祷師とその信者による団体参拝講に分類した。二節以降でこれらの講を具体的事例をもって説明している。まず漁業者による参拝講は山形県鶴岡市温海地区龍王講の事例である。この温海地区の龍王講の場合、旧温海町に概当する五十川・鈴・暮坪・米子・釜谷川の五つの小規模漁村の住人で構成されており、講の活動としては四月の春大祭への団体参拝への参加と魚類供養会の実施である。善宝寺の秋大祭は祈祷会のみならず魚類供養会も開催されるのだが、温海地区龍王講は秋大祭へは参加せず、村落内で供養会を開くところに特徴がある。

三節は、秋田県能代市の能代市龍王講についての事例である。従来この龍王講は最大の講とされていたが、その活動の実態は今まで調査されたことがなかった。この龍王講においても判明してきたのは、講の衰退であった。昭和三〇年代が書いた記事を読むと講員千名・団体参拝者四百名と書かれているのだが、現在では二百名前後にまで減少している。この講員の減少は能代市の社会構造の変化が上げられようが、調査の結果、それだけが原因でなく、能代龍王講の制度にも問題があった。能代龍王講では、講の下に各地区を担当している組という組織を置いている。組の責任者である組長のもとで講の活動を行うので、もし組長が亡くなり家族のものがその組を継承しなければ、組はそこに消滅してしまうのである。組は実質的には世襲制のため、家族に継承者がいるかどうかの問題になる。つまり能代龍王講の縮小は社会構造の変化のみが問題になるのではなく、組が世代交代できるかで講人数の変動が起きると結論づけた。

第四節では新潟市の小杉講の活動に注目した。小杉講は神降ろしによる託宣を行う祈祷師が講長をつとめる講である。新潟市にはこのような講が五つほどありいずれも大祭時などに団体参拝を行っている。小杉講の特徴は講長の守護神が善宝寺の守護神である龍神であり、神降ろしの際、降りている神もこの守護神である龍神である。本論では、この小杉講によって行われている立春お水取りの行事について詳細に説明している。その結果お水取りの行事は昭和四〇年に成立した新しい行事であり、「お水とり

水は龍神の血で万病に効く」というように小杉講独自の意味を持ち行事を行っている。小杉講が独自に始めた行事なのだが、その後善宝寺が正式に寺の行事として認め、現在では善宝寺と小杉講が共同でお水取りを行っている。

第五章の「龍王講と靈驗譚の語り」では、善宝寺龍王講の機関誌である『龍王講だより』を対象に信者による「靈驗譚」を言及している。『龍王講だより』は平成二二年までに四〇号が刊行されており、計一〇六話が掲載されていた。これら靈驗譚を執筆者がいかなる講員か、どのような状況をさして靈驗としているかに着目したところ漁業関係の講員の場合、悪天候・船舶事故・網のトラブルのようなときに祈願したところ不可思議助かったような体験を「靈驗」としている。祈祷師による参拝講に所属している講員の場合、病気・怪我の靈驗譚が最も多く次いで開運・幸福にまつわる体験を「靈驗」としている。どちらの講員においても最も多い靈驗譚のパターンは自らのまたは家族の生命の危機的状況のなかで靈驗が語られ、自らに起こった奇蹟を他者に向かって語っていく場が『龍王講だより』であったと結論付けた。

論文審査結果の要旨

本論文は、五章からなる本文の前後に序章と終章を配する七部構成で書かれている。

序章の「仏教と現世利益信仰」では、現世利益信仰研究の意義について研究史を振り返りつつ批判的に整理し、教団と信者との中間に位置する寺院の働きに注目するという論者の独特な研究視角が提示される。「第一章龍澤山善宝寺―先行研究と寺院沿革について―」では、善宝寺に関する先行研究の整理が行われ、これまでの研究が善宝寺についての寺院史的研究と、善宝寺信仰の民衆レベルでの受容実態の研究の二種の視座から独立になされてきたことが指摘される。続く「第二章善宝寺の信者獲得と生存戦略」では、戦後の善宝寺の境内整備と信者の拡大を関連づけ、とりわけ『善宝寺略縁起』の分析を通じて、善宝寺信仰の展開の中に龍神と現世利益を結び付ける論理展開が生まれてきたことが述べられる。次の「第三章漁村と龍神信仰」では、山形県と新潟県の漁村に見られる龍神信仰の事例が取り上げられ、信者側から見た善宝寺に対する現世利益理解がまとめられる。論者はここで善宝寺が配布する祈祷札に二種あることに注目し、とりわけ「流し札」と呼ばれる海に流す紙製の納札を開山縁起に由来するものであることを指摘し、そうした祈願を「公」の祈願と「私」の祈願の両方として解き明かしている点は斬新である。続く「第四章善宝寺龍王講の活動と議員の信心」では、善宝寺の信者団体である「善宝寺龍王講」の歴史的展開をまとめ、同じ「龍王講」と名乗りながらもその祈りの内容や信者をまとめ上げる原理の違いから、三種のタイプに分けられることを指摘する。そして「第五章龍王講と靈驗譚の語り―『龍王講だより』の記事から―」では、龍王講の機関誌である『龍王講だより』に所載の106話の「靈驗譚」が分析され、それらが語られる意味を信者の現世利益信仰の内実として把握する。最後の終章「信者の祈願と寺院の生存戦略のあいだ」では、これまで指摘してきたところを統合し、善宝寺における現世利益信仰は、縁起にある戒脈授戒が〈龍神による前世利益〉〈龍神の現世利益の拡大〉〈新たな現世利益の発生〉〈祈祷会による現世利益〉といった四つの要素の展開する中に構成されていることが述べられ、寺院がとってきた生存戦略についてまとめられる。

本研究は、論者自身のフィールドワークを通じて得られた文献資料と聞き取り調査資料をもとに論証がなされており、その地道な努力と緻密な分析は高く評価できる。また、本論文の研究視角をはじめ、随所に見られる新知見は、斯学の発展に寄与するところ大なるものがある。よって、本論文の提出者は、

博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。